

氏 名	鎌 田 洋 一 郎 かま た よう いち ろう
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 98 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 6 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	口唇の病理組織学的特殊性に関する実験的研究

(主 査)
論文調査委員 教授 後藤光治 教授 岡本耕造 教授 美濃口 玄

論 文 内 容 の 要 旨

Behçet 症候群は皮膚粘膜眼症候群の一つであって、その主症状は皮膚粘膜の移行部を中心に現われる。しかし、その原因は未だ解明されていない。著者は口唇皮膚粘膜移行部の病理組織学的特徴を探究するために、家兎を用い、主として該部の組織アレルギー性変化を観察した。すなわち口唇では皮膚部、移行部、粘膜部およびそれぞれの基底に相当する中心部の4区分を観察するとともに、肺、心、腎についても観察しその成績を比較検討した。

まず家兎口唇の組織標本、血管内墨汁注入標本および合成樹脂注入標本を作製し、主としてその血管分布を観察した結果、移行部は皮膚部および粘膜部に比較し、上皮層は厚く、乳頭は発達良好で、毛細管蹄係は丈が高くかつ多く、結合織中の血管分布は豊富であることを知った。

牛血清を抗原として感作した家兎に外頸動脈より牛血清 1cc を注入再感作し、再感作後 12, 24, 48, 72, 96 時間後に試獣の口唇につき組織学的観察を行なった (実験Ⅰ)。この場合にはいずれの例においても弱度の漿液性炎の像を認めるが、この像は特に 72 時間後の例に多く現われる。

また再感作時修飾因子としてアドレナリン 1cc を皮下注射した場合の成績を前者と比較すると次のとおりである (実験Ⅱ)。すなわちこの場合にも試獣のいずれにもアレルギー性組織変化は前者に比しその度は増強するのみならず、病変発来もまた促進せられ 24, 48 時間後の実験例に最も多く現われる。

再感作時修飾因子として Freund の Adjuvant を附加した場合 (実験Ⅲ) にも口唇にアレルギー性組織変化が現われる。これを前二者の場合の成績と比較すると口唇各部の病変はいずれも前二者よりも強度である。その発現時間も前二者の場合より促進し、12 時間後の実験例に最も多く現われる。

口唇の各部ごとに発現するアレルギー性組織変化を比較すると、いずれの実験においても移行部に病変が最も多く発現する。

また以上の実験の場合に肺、心、腎においてもアレルギー性組織変化が出現するが、その程度は実験Ⅰ, Ⅱ, Ⅲを通じてほぼ同程度である。

さらに家兎口唇各部の上皮層、乳頭層、網状層または固有層、筋線維層の4層に区分して病変を比較観察すると次のとおりである。

1) 毛細管系の変化は毛細血管の発達度には比例しない。変化は毛細管前後の小動静脈に強く発現する。移行部はこの毛細管前後の小血管が豊富に分布していて、実験的アレルギー性組織変化もこの部に強く発現している。

2) アドレナリンの組織アレルギー性変化発現に及ぼす影響は各部各層に均等でない。アドレナリンは細小動静脈の比較的多い血管分布を有する部位において増強的に作用する。これはアドレナリンの持つ血管収縮作用のほかに、内皮細胞の透過性促進作用ならびに血管収縮による血圧上昇に伴う二次的鬱血招来作用に基因するものと考ええる。

3) Adjuvant を附加した実験ではアレルギー性組織変化は各部各層においてほぼ一様に増強して発現するが、特に中心部において変化が強い。すなわち比較的太い血管分布をもつ部位に変化が強く発現するといえる。

Behçet 症候群は臨床的には上皮移行部を中心に発来するものであるが、以上の成績よりその成因を按ずるに、この部のアレルギーに対する局所的素因が主因子であると判断せられる。

論文審査の結果の要旨

皮膚、粘膜の移行部は特定疾患の好発部位である。著者の実験目的は口唇すなわち皮膚、粘膜移行部の病理組織学的特殊性を解明するにある。著者はまず正常家兎の口唇諸区域につき普通組織標本、血管内墨汁注入または合成樹脂注入標本等を作成し、組織像を相互に比較検討した。その結果はつぎのとおりである。

移行部は皮膚部、粘膜部に比し上皮層は厚く、乳頭の発育は良好で、毛細管蹄係は丈が高くかつ豊富で、結合織中の血管分布もまた多い。牛血清で再感作を行ない、口唇諸部を観察すると、弱度の漿液性炎が認められる。再感作時にアドレナリンを併用すると叙上の病変は一層強度かつ早期に発来する。

また、再感作時に Adjuvant を附加するとその病変は前2者よりも一層強度かつ早期に発来する。口唇を上皮、乳頭、固有、筋線維等の諸層に区別して観察すると上述の病変は毛細管前後の小動静脈に強く発現している。アドレナリン併用実験の場合にはこれらの病変は、細小動静脈の多い部分に強く発現し、Adjuvant 併用実験の場合には前者よりもやや太い血管の分布部に病変は強く発現する。

このように本研究は Behçet 病等の臨床知見に寄与するところが多く、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。